



馬場 起氏のご逝去を悼む

植調協会第4代会長の馬場 起氏が10月6日急性心不全のため急逝された。昨年4月末脳梗塞で倒れて以来入院、1年半にわたる闘病生活を続けられていた。80才の生涯であった。

馬場さんは、大正2年福島市生まれ、昭和10年東京帝国大学農学部卒、農林省農事試験場に入省。稲の研究—ことに稲の生理障害に関する分野では、わが国の第一人者であった。

農林省在職中は、農業技術研究所長等の重責にある傍ら、国の各種委員会の学識委員として各方面で活躍された。また技術援助等で、東南アジア、ヨーロッパ等へも出向き、内外の稲作技術の発展に数々の大きな足跡を残された。

昭和32年「水稻の胡麻葉枯病及び秋落の発生機構に関する栄養生理学的研究」で日本農業賞（安藤賞）を受章。その後も学術的な基礎研究の領域に留まらず、常に農場で役立つ栽培技術の追究に心血を注がれ、58年秋勲3等旭日中級章に輝やいた。

馬場さんは、植調協会生みの親であった。昭和38年、当時農林水産技術会議事務局研究調整官として、新政策—農業基本法に沿って、研究機関の再編整備や水田作部門の研究推進に活躍されていた。新技術の台頭著しい中で全農薬の2割を占め、販売額100億になんなんとする除草剤に着目し、受・委託試験を研究調整官室で幹旋するのは問題である。除草剤の発展のためには法人組織をつくってやった方がよい、と考え腹心の吉沢調整官補佐（第6代会長現植調協会常任顧問）と図り、協会設立の立案に着手された。

設立の方針が決まるまで裏舞台で東奔西走し、関係者と熱心に話を重ね苦労された。遂に小

倉農林水産技術会議会長の内諾をとりつけることに成功し決着をみた。馬場さんは、最もやっかいな実務処理を吉沢補佐に一任して万全をつくされた。人を見抜く達人でもあった。

かくして昭和39年11月12日、財団法人日本植物調節剤研究協会が設立され、わが国雑草防除の歴史に残る快挙となった。

昭和59年12月、6年間の植調協会理事から第4代会長に就任された。2年間の在任中特に農薬の環境への影響やコメのコスト低減化にむけた①一発処理剤の開発、②大型水田による除草剤のモデル試験等の技術課題を積極的に進められた。

農業技術研究所長時代、研究機関の筑波移転問題で修羅場を誠意と粘りで乗り切り、研究百年の計を通されたが、それがもとで片肺を失うこととなった。

夫人の言によれば、若い頃は映画監督になりたかったそうである。“ロマンチストだったんです。ポケットに映画ムーランルージュの券が入っていたこともありまして”と一面が語られた。

葬儀の日、稔った稲穂を飾ってほしいという馬場さんの生前の願いが伝わり、方々から稲が寄せられ、稲の研究者にふさわしい葬祭となった。

例年ならこの時期、稲など見られないが、幸か不幸か、今年の凶作が馬場さんの最後の望みを叶える結果となった。きっと馬場さんがお元気でいられたら、研究の炎が立っていたことと思う。しかし今は現世になく、薫陶を与えた後継者の活躍している姿を天に在って莞爾として眺めていられることであろう。

心からご冥福をお祈りします。